<table>
<tr><td colspan="4">令和７年度　　雄山高等学校アクションプラン　　－１－</td></tr>
<tr><td>重　点　項　目</td><td colspan="3">（１　学習活動）学習活動</td></tr>
<tr><td>重　点　課　題</td><td colspan="3">教科指導方法の改善と基礎学力の定着・充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="3">・与えられた課題に真面目に取り組んでいる生徒がいる一方で、自身の進路に対する具体的な目標を明確に持てないため、学習意欲が低く、家庭学習時間が十分に確保できていない生徒もいる。また、予習・復習にかける時間に個人差があり、基礎学力が十分に定着していない生徒が多い。
・教員間での互見授業や生徒に対して授業アンケートを行い、校内外の教員や生徒からの評価をもとに、各教員で授業改善に取り組んでいる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達　成　目　標</td><td colspan="2">①授業力の向上
ア　互見授業参加回数が年２回以上の教員の割合
イ　授業の工夫点や改善点の共有</td><td>②学習内容の定着、学習実態の改善
ア　学習内容を理解するために自分なりに工夫している生徒の割合
イ　学習にどのように取り組んだかの把握</td></tr>
<tr><td colspan="2">ア：７０％以上</td><td>ア：７０％以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・互見授業を通して、個々の学力や進度に応じた教材について研究開発を進める。また、授業方法の改善や工夫に生かした点を共有し、授業力の向上に生かす。
・ワークシート等を用いて、生徒の理解度を把握し、授業改善につなげる。
・授業アンケート（７月・12月）を実施し、生徒の実態を把握する。
・ＩＣＴの利用が適している場面では、積極的に活用し、理解や思考の深まりを促す。</td><td>・授業アンケート（７月・12月）を実施し、生徒の学習における工夫点や実態を把握する。また記述式の設問を設定し、どのように学習に取り組んだかを具体的に把握し、改善点等を助言していく。
・担任による個別面接等で生徒の学習の取り組み状況を把握し、進路目標と絡めて主体的に学ぶ意欲を喚起する。
・具体的な進路目標をもたせられるよう学年や進路指導部と連携をし、自分に合った学習の進め方を考えさせ、計画的に学習に取り組ませる。</td></tr>
<tr><td>達　成　度</td><td colspan="2">互見授業について、年２回以上参加した教員の割合は38.5％となり、当初設定した目標には及ばない結果となった。しかしながら、校務や分掌等で多忙な状況の中にあっても、１人で５回以上参加するなど、授業改善に高い意欲をもって主体的に取り組む教員も見られたことは成果の一つである。参加回数には個人差があり、十分に参加できない現状があることが課題として明らかになった。</td><td>授業アンケートの結果
質問１：予習・復習に十分な時間をかけたか
1年：43%　2年：49%　3年：57%　　全体：49.7%

質問２：授業に意欲的に取り組んだか
1年：73%　2年：68%　3年：77%　　全体：72.7%

質問３：学習内容を理解しようと粘り強く取り組んでいたか
1年：71%　2年：62%　3年：79%　　全体：70.7%</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">互見授業を通して得られた授業の工夫点や改善点については、職員会議等で共有を行い、教員間で学びを広げることができた。特にICTの活用においては、生成AIを用いた文章の推敲や教材用画像の作成など、授業改善に効果的に活用する実践が紹介され、情報機器を積極的に取り入れようとする教員が増えてきている。</td><td>評価の３つの観点のうち、「主体的に学習に取り組む態度」については、授業中の様子だけでなく、課題やノートへの取組も評価対象とすることを生徒に共有した。また、基本事項が十分に身に付いていない生徒に対して補習を行い、学習意欲の向上を図った。さらに、進路ガイダンスや校外進路学習、進路研修旅行、総合的な探究の時間を活用し、生徒が自らの適性や興味、強みを考え、将来の進路を主体的に捉えられるよう多様な機会を設定した。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>C</td><td>・あまり達成できなかった。</td><td>A　・達成した。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="3">・互見授業の実施回数を重視しているようだが、良い実践を動画で共有し、取り組みの質を高める方向や、授業を録画してアーカイブ化し、生徒が欠席時や理解が追いつかない場面でも自分のペースで学び直せる環境を整えてほしい。
・互見授業による相互啓発の効果は評価できるが、先生方の個性が生徒の魅力につながっているため、その良さを守りながら互見授業を行ってほしい。
・ICT活用や生成AIによる効率化を高く評価しつつ、生徒の思考力を育むために適切な利用の在り方の検討をお願いしたい。
・基礎学力向上にICTを活かす取り組みを良い方向と捉え、意欲の高い生徒にもより効果的な活用方法も検討してほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・今後は、互見授業への参加の在り方や共有方法を工夫し、教員一人一人が無理なく授業改善に関われる体制づくりを進めるとともに、授業力向上に向けた取組を継続的に充実させていく必要がある。</td><td>・昨年度と比較して達成率が10％向上し、目標を達成した。ICTを活用した学習が進み、個別最適化に向けた取組が広がっている。今後は、デジタルとアナログを効果的に併用し、理解を深める学習方法や粘り強く取り組む力を育成するとともに、生徒の実態に応じて学年・教科担当と連携し、意欲を高める指導を進めていく。</td></tr>
</table>

（評価基準　A:達成した　B:ほぼ達成した　C:あまり達成できなかった　D:達成できなかった）

<table>
<tr><td colspan="5">令和７年度　　雄山高等学校アクションプラン　　－２－</td></tr>
<tr><td>重　点　項　目</td><td colspan="4">（２ 学校生活）規範意識の向上と保健指導</td></tr>
<tr><td>重　点　課　題</td><td colspan="2">①遅刻者数の減少
②スマートフォン等、端末機器の節度ある使用</td><td colspan="2">防災意識を高める</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">①R6年度遅刻0回の人数
1学年　78名/118名【66%】 6回以上7名（5%）
2学年　76名/102名【74%】 6回以上3名（2%）
3学年　94名/139名【67%】 6回以上8名（5%）
全体 248名/359名【69%】
②スマートフォン等の利用に関する調査
から下記のような結果がみられた。
・1日（平日）の平均利用時間
3時間未満…42%（5時間以上18%）
・何時まで利用しているか？
23時以降…54%（朝3時まで使用…3%）</td><td colspan="2">・能登半島地震では富山県も地震とは無縁ではないことを実感した。また近年、以前は考えられなかった自然災害も起こっている。保健委員会でのアンケートでは、災害時に役立つ情報を知りたがっている生徒が多くいた。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達　成　目　標</td><td colspan="2">①遅刻0回の人数　各学年82名以上
全体の75%以上</td><td colspan="2">③災害への備えに関する意識を高める。</td></tr>
<tr><td colspan="2">②1日平均利用時間 2時間未満…60%
睡眠時間確保のため、23時以降使用しない。…70%</td><td colspan="2">災害への備えに関する知識を得て、身の安全を図れるようになる。</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">①毎朝正門前に立ち、生徒への声かけや登校の様子等を観察するとともに、特に時間ぎりぎりに登校してくる生徒に対しては、声から指導及び各学年には教室前廊下に立っていただき、声かけ指導等を行ってもらう。また、遅刻2回の生徒に対しては学年と協力して面談等を実施し、原因を振り返らせるとともに、改善策を立て、生活習慣の見直しを促す。但し、遅刻や欠席の原因として、メンタル不調が認められる場合は保健厚生部と連携し、対応にあたることとする。
②全校集会やHR、ネットトラブル防止教室等を利用し、スマートフォンの正しい使い方や長時間使用による健康被害や危険性等について周知する。また、生徒会や風紀委員会にスマホ使用ルール等について話し合いを持ってもらうことで、スマートフォン等端末機器との向き合い方についての啓発活動につなげる。アンケートを実施し、使用状況を確認する。</td><td colspan="2">・アンケートを年２回実施し、自分の生活を振りかえることで、災害時への備えについて考える機会とする。
・「保健だより」や生徒保健委員会で、ＩＣＴを活用し、災害時に役立つ情報を発信し、防災への知識と理解を深める。また、万が一の時に実際に身の安全を図る行動をとれるような土壌作りをする。</td></tr>
<tr><td>達　　成　　度</td><td colspan="2">①R7年度遅刻0回の人数 （1/16現在）
1学年　84名/111名【75.6%】6回以上4名（3.6%）
2学年　89名/115名【77.3%】6回以上3名（2.6%）
3学年　81名/100名【81%】6回以上1名（1%）
全　体254名/326名【77.9%】
②端末機器の節度ある使用について
・1日（平日）の平均利用
3時間未満…50．9%（5時間以上15．1%）
※2時間未満…18%
※前年度 3時間未満…42%（5時間以上18%）
・何時まで利用しているか？
23時以降…50．8%（朝3時まで使用…3.7%）
※前年度23時以降…54%（朝3時まで使用…3%）</td><td colspan="2">・防災に関する知識や意識に変化があったのかを確かめるため、11月に2回目のアンケートを実施した。
地震や防災に関するクイズの正解率
ほぼすべての問いで上昇
前回特に正解率が低かった問題は約2倍上昇
防災意識に対する変化
非常に高まった23%　少し高まった58%　計81%
登下校中や学校外にいる時に再び地震が起きたらどうするか、イメージできるか
具体的にできる23%　何となくできる59%　計82%</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">①遅刻数の減少について
・学年、担任に対して、8:40着席指導の協力を求めた。
・遅刻2回の生徒に対して面談を行い、原因を振り返らせるとともに、改善策を立て実行を促した。
②端末機器の節度ある使用について
・アンケート調査結果からは、使用時間が3時間未満の割合が約8ポイント好転し、23時以降も使用と答えた生徒の割合も約3ポイント好転している。また5時間以上の使用及び朝3時まで使用すると答えた生徒数はわずかではあるが増加した。
・インターネット利用に関する悩みや不安として、「SNSでの　人間関係」「友人からの既読確認」「自分の悪口が書かれていないか心配」「やり取りが終えられない」「書いたメッセージに反応がない」等、長時間使用の原因となる内容があった。節度ある使用については、今後も生徒に様々な場面で伝える必要性を感じる。</td><td colspan="2">・６月にアンケートを行い、能登半島地震での実際の行動等を振り返った。また地震や防災に関するクイズを１２問出し、実態を把握した。
・保健委員会でクイズの問題と答えを書いたポスターを作成し掲示した。保健だよりでも知らせた。正答率が悪かった問題は校内放送で注意を促した。
・文化発表会では、保健委員が作った身近なものを活用した防災グッズの展示、緊急連絡カードの作成・配付、ポスター掲示を行った。
・保健委員会で非常食の試食会を行い、パンやご飯等を食べ比べ、味や感想を保健だよりで報告した。
・１１月に２回目のアンケートを行い、学校保健委員会で結果を発表した。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td>①遅刻0回の人数及び6回以上の遅刻者数ともに改善が見られた。
②節度ある使用に関しては、引き続き全校集会やHR、講演会等で長時間使用の弊害やネットトラブル防止に努めなければならないと考える。</td><td>B</td><td>・2回目のアンケートで防災意識に変化があったかどうか聞いたところ、非常に高まった、少し高まったを合わせると81%が「防災意識が高まった」と答えていた。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="4">・遅刻は将来の社会的責任につながることを踏まえ、生徒が優先すべきことを理解できるよう粘り強く声をお願いしたい。
・授業への姿勢が整えば遅刻やスマホ使用も改善に向かうと思われる。他人を過度に意識する傾向をどう変えるかが重要だと感じています。
・スマートフォンの使用実態は把握しにくいため、ネットトラブルの危険性を具体的に伝えながら正しい使い方を指導していただきたい。
・生徒の防災意識を高めるために、防災グッズをそろえるだけでなく、災害地の視察やボランティア活動との連携を進めることが有効である。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・生活習慣の見直しや改善に改めて努めさせるとともに、時間を守る意識や先を見越した行動ができるよう指導を継続したい。
・アンケートの結果から、スマートフォン等の端末機器の使用時間は相変わらず多い。また、ネット上でのトラブルや被害等についても、知りあった人物と直接会ったという回答や、トラブルや被害に遭った際に誰にも相談しないと答える生徒が半数見受けられたことは大きな問題であると考える。便利なツールではあるが、「正しい利用・使用」について、今後も指導や支援していくことが重要であると考える。</td><td colspan="2">・アンケートの結果から、地震や防災への知識は高まったように思う。また、実際に地震を経験したことにより、防災意識や危機管理意識も高まったように思う。しかし、具体的な避難場所や避難経路、家族との連絡方法については、調べたり決めたりしていない人が多いこともわかった。せっかく高まった防災知識や意識を今度は具体的にどう行動したらよいかにつなげていきたい。今後は、学校周辺のハザードマップや避難場所を調べたり、家族と防災について話し合う機会を作ったりして、「もしも」の時に落ち着いて自分や周りの人の命を守る行動がとれるようにしたい。</td></tr>
</table>

（評価基準　A:達成した　B:ほぼ達成した　C:あまり達成できなかった　D:達成できなかった）

<table>
<tr><td colspan="5">令和７年度　　雄山高等学校アクションプラン　　－３－</td></tr>
<tr><td>重　点　項　目</td><td colspan="4">（３ 進路支援）希望する進路の実現に向かう力を育む</td></tr>
<tr><td>重　点　課　題</td><td colspan="4">進路意識の向上と進路支援の充実</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="4">・社会とのかかわりの中で自己を見つめ、自らの進路を主体的に考えようという意識が希薄である。
・進路実現に向け、向上心を持って粘り強く挑戦する姿勢が不十分な生徒が見られる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達　成　目　標</td><td colspan="2">① 面談の充実

面談を通して「自己理解が深まった」「自らの進路を主体的に考えるために役立った」と考える生徒の割合</td><td colspan="2">② 自らの進路選択に対する満足度

卒業時に「自らの進路選択に満足している」と感じる生徒の割合</td></tr>
<tr><td colspan="2">８０％以上</td><td colspan="2">８０％以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・担任との面談の機会を重視し、進路希望調査、学習実態調査や成績、参加した行事の振り返り等を継続的、有機的に結びつける。
・必要に応じて教科担当者との面談を設定するなど、生徒の自己理解を深めるために全教職員で連携する。
・面談を重ねることにより、進路意識を向上させ、学習習慣の確立や生活習慣の改善を促し、自ら希望する進路の実現に向けて粘り強く挑戦する姿勢を育てる。</td><td colspan="2">・総合的な探究の時間を有効に使い、進路ガイダンス、進路研修旅行、校外進路学習、職業人講話、立山町企業見学、インターンシップなどを行うことにより、自己理解・社会理解を深めるようにする。
・オープンキャンパス、学校説明会、職場見学など、生徒が自らの進路を主体的に考えるために必要な情報の収集ができる環境を整える。
・一人一人の生徒の実態や希望を踏まえて、全教職員の理解と協力のもと、進路実現に向けて一斉指導や個別指導を行う。
・資格取得に対する生徒の意識を高める。</td></tr>
<tr><td>達　　成　　度</td><td colspan="2">面談を通して
①「自己理解が深まった」
②「自らの進路を主体的に考えるのに役立った」と考える生徒の割合
1学年　① 67.8%　② 78.2%
2学年　① 62.8%　② 77.9%
3学年　① 81.6%　② 88.1%</td><td colspan="2">3学年の生徒で「自らのの進路選択に満足している」と答える生徒の割合:84.5%</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・面接週間などで定期的に担任と面談を行い、学習習慣や生活習慣等について話し合う機会を設けた。また、興味のある分野や将来の目標についても生徒の考えをじっくりと聞き、適性を踏まえて最適な進路選択ができるよう相談した。
・学期ごとに学習や行事、特別活動などについて振り返りを行い、自己理解を深める機会を設けた。
・担任以外にも、教科担当、部活動の顧問などと必要に応じてタイムリーに面談を行っている。</td><td colspan="2">・3学年の生徒は、講演会等の進路行事、オープンキャンパスや就職応募前職場見学等に意欲的に参加できるようしっかり準備を進めることができた。
・進学のための補習、志望理由書作成や面接、教科指導等の個別指導を通して学力の向上を図り、生徒一人ひとりの目標達成のために全教職員が一丸となって指導に取り組んでいる。
・本人はもちろん家庭の意思の把握に努め、満足できる進路選択ができるよう、面談を繰り返している。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>C</td><td>・3学年においては、目標をほぼ達成できている。
・1・2学年では、目標を達成できなかった。1月に実施したアンケートには、「面談の回数や時間を増やしてほしい」「したいことがわからない場合はどうしたらよいか」「進路相談する機会が増えてほしい」という要望も寄せられた。</td><td>B</td><td>・3学年は8割以上の生徒が「自分の進路選択に満足している。」と答えている。また、多くの教員が親身になって関わり、「自信につながった」「自分への理解が深まった」という思いを持つ生徒が多い。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="4">・生徒には進路への悩みや個人差があるため、引き続き寄り添った面談を中心に支援していくことが大切です。
・日頃の関わりの積み重ねによって、多くの生徒が自分の進路を真剣に考えている点は大きな成果である。
・面談の充実度は3学年で目標を達成している一方、1・2学年では改善の余地があり、各学年で目標を達成できるよう支援体制を見直してほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・面談を実施する回数や時期、内容等について吟味し、生徒が将来の目標や不安を自分の言葉で語ることができるように面談を充実させていかなければならないと考えている。
・与えられたものに取り組むだけでなく、自己理解と社会理解を深め、主体的に進路を考えて日々の学習や様々な活動に前向きに取り組めるようサポートする方策を考えたい。
・面談を繰り返し行う中で本人の進路意識を明確にし、受け身ではなく、広い視野を持って自ら十分に準備をして受験に臨めるようにすることが重要だと考えている。</td><td colspan="2">・生徒が希望する進路は多岐にわたる。それぞれの進路希望に応じた対応ができるように、常に指導体制の見直し、教職員全員の協力が必要である。
・1・2学年の生徒も卒業時に「自分の進路選択に満足している」と答えられるように高校3年間の中で、総合的な探究の時間の使い方、進路的な行事のあり方、受験に向けての一斉指導と個別指導のあり方等について効果的な方法を模索していきたい。
・希望する進路実現に向けて早い時期から準備できるよう、低学年での進路に対する意識づけが重要である。</td></tr>
</table>

（評価基準　A:達成した　B:ほぼ達成した　C:あまり達成できなかった　D:達成できなかった）

<table>
<tr><td colspan="5">令和７年度　　雄山高等学校アクションプラン　　－４－</td></tr>
<tr><td>重　点　項　目</td><td colspan="4">（４ 特別活動）特別活動および図書指導の充実</td></tr>
<tr><td>重　点　課　題</td><td colspan="4">ボランティア活動の充実および読書習慣の確立</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・生徒会からの呼びかけによる校内ボランティアや地域でのボランティアに参加する生徒が一定数いる。昨年のボランティア参加者のべ人数は、５７８人であった。
・ボランティアに参加した生徒は、他学年の生徒と一緒に協力しながら、自分が学校や地域で役立っている喜びを感じており、また参加したいと感じている生徒が８６．９％いる。複数回参加する生徒もいるが、活動に消極的な生徒も４割以上いる。</td><td colspan="2">・読書好きの生徒がいる一方で、全体として図書に対する興味・関心は低い傾向にある。そのため、ＨＲや授業での図書室の利用を除くと、自発的に図書室を利用するのは一部の特定の生徒である。昼休みや放課後に図書室を開放し、図書委員が中心となって図書の貸し出しを行っているが、来館人数は一日平均１２人程度、図書の貸し出しは一人平均２冊で、生徒全体には広がっていない。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達　成　目　標</td><td colspan="2">①校内外のボランティアに参加したのべ人数</td><td colspan="2">②一日当たりの平均図書室利用者数</td></tr>
<tr><td colspan="2">６００人以上</td><td colspan="2">１２人以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・生徒会から、ポスターや校内放送で、どんな活動をするのかがわかるように発信し、未経験の生徒にも見通しがもてるようにするとともに、ボランティアに参加してよかったという生徒の声を発信する。
・生徒会が企画するボランティアや、地域でのボランティア参加を、参加する機会を多く設定する。
・ボランティア活動参加人数の把握に加え、ボランティア活動に参加してよかったことをアンケート調査する。</td><td colspan="2">・図書室の利用者総数とクラス別の図書貸出総数を掲示する。
・図書委員会の活動の活性化を図り、図書委員のアイディアを積極的に生かし、図書選定を行ったり特集コーナーを設けたりし、読書の魅力をアピールする。
・授業やＨＲでの図書室活用を促進し、読書へのきっかけを拡大していく。また資料となる書籍や検定・小論文対策の書籍・資料コーナーを充実させ、生徒が活用しやすいよう工夫する。
・アンケートを実施し、図書室の利用や読書に対する意識の実態を把握し、意識の向上につなげる。</td></tr>
<tr><td>達　　成　　度</td><td colspan="2">・校内外のボランティアに参加したのべ人数は、６１８人であった。</td><td colspan="2">・１２月末現在での来館者数は１，５１０人で、一日平均１０．３人であった。</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・「花いっぱい運動」を５月、１０月、１１月の計３回、「五百石駅地下道清掃」を６月、１０月の計２回行った。
・生徒会執行部より、ボランティアへの参加の呼びかけ（放送、掲示）を行った。執行部員で毎回ポスター作成した。
・立山町でのイベントなどのボランティアの依頼が３件あり、放送や掲示で呼びかけた。</td><td colspan="2">・新着図書コーナーを設置し、図書だよりで知らせたり、リクエストのあった検定試験対策本を充実させた。図書室に入れてほしい本のリクエストを常に受け付けている。
・授業での利用に対応した。
・図書委員会を１～２ヶ月に一度開いた。おすすめの本の選定や教養講座の運営を行った。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>A</td><td>昨年より、のべ参加者が増加し目標を達成した。</td><td>C</td><td>・来館者数は目標の８６％であった。本の貸し出し数は１人平均１．７冊であった。（昨年度は２冊）
・昼休みの時間帯に自主学習で必ず来館する生徒がいたり、放課後に公共交通の待ち時間として来館する生徒も少数ではあるがいる。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="4">・ボランティア活動については、大雪時の通学路や駅周辺の雪かきを生徒が担うことで、安全確保と地域貢献の両面から有意義である。
・社会参加の機会としても価値が高く、生徒が喜びや達成感を得ながら成長につながる取り組みである。今後は参加者の感想や意見を取り入れ、これまで参加していない生徒にも参加しやすい募集方法を工夫してほしい。
・読書習慣は環境の変化もあって身につきにくくなっているが、図書室の利用しやすい環境づくりや実態把握を進め、読書に触れる機会を広げ、図書室の利用も含めて継続的な働きかけをお願いしたい。
・デジタル社会でも読書で得られる力は大きく、進学・就職に関わらず習慣として身につけてほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・今年度ボランティアに参加した生徒は、約６割で、複数回参加しており、また参加したいと思った割合は、８７．６％であった。今年度同様、参加した生徒の声を教室に掲示し、今後も「一度参加してみる」ことは促していく。
・学校外ボランティアの依頼が増えてきており、今後も生徒全体へ周知し、誰かの役に立つ経験や感謝される経験をしてもらいたい。</td><td colspan="2">・アンケートでは、7割程度の生徒が図書室の開館時間や環境・雰囲気を好意的に思っていた一方で、入りにくいという生徒が17%いた。入りやすくする手立てを考える。
・１年生４月の図書オリエンテーション以降の来館を習慣化する方法の一つとして、授業やＨＲでの図書室利用を勧める。
・図書委員の活動を活性化させ、生徒の読書への興味・関心を高める環境づくりをする。</td></tr>
</table>

（評価基準　A:達成した　B:ほぼ達成した　C:あまり達成できなかった　D:達成できなかった）

重点項目	（５ その他）専門科目(家庭)の学習指導の充実				
重点課題	専門科目の基礎的、基本的な知識と技術の習得を図るとともに、生活文化科での学びに対する達成感や充実感を高める。				
現状	・家庭や地域における生活体験の希薄化により、家庭に関する基礎・基本からの学習が必要であり、自分に自信がなく、より専門的な資格取得に挑戦しようする気持ちを持てない生徒が増えている。				
達成目標	①家庭科技術検定における合格率・取得率				②卒業時における生活文化科に対する満足度として、３学年生徒へのアンケートを実施し、生活文化科で学んで「よかった」と答えた生徒の割合　90%以上 記述式項目で、専門科目の学習で身につけたことや成長したことを回答することができている。
			合格率（受検者数に対する割合）	取得率（在籍者数に対する割合）	
	３・２級	食物調理 被服製作	100% 100%	100% 100%	
	準１級	食物調理 被服製作(洋服) 〃　(和服)	90% 80% 90%	90% 80% 25%	
	１級	食物調理 被服製作(洋服) 〃　(和服)	85% 85% 85%	28% 31% 31%	
	※準１級（和服）、１級は選択者が受検している。 ※前年度までの実績と今年度の生徒の実態をふまえ、検定ごとに目標を設定した。				
方策	・家庭科技術検定合格に必要な学習指導、実技指導の徹底を図る。				・専門科目全般の学習指導および体験的総合的な学習の充実を図る。
達成度	３・２級	食物調理 被服製作	100% 94%	100% 94%	・「生活文化科で学んでよかったか」というアンケートの項目において、「大変よかった」26%、「ややよかった」66%、「ややよくなかった」8%、「よくなかった」0%であった。 ・ほぼ全員の生徒が専門科目の学習を通して成長したことについて、「検定を通して知識と技術が身についた」「ボランティア活動で積極的に人と関わるようになり、自信がついた」など自分自身を振り返ることができていた。
	準１級	食物調理 被服製作(洋) 〃　(和)	76% 79% 100%	74% 79% 33%	
	１級	食物調理 被服製作(洋) 〃　(和)	91% 100% 62%	29% 37% 23%	
具体的な取組状況	・３級、２級については、基本的な知識と技術の習得を目標に細やかな指導をした。 ・準１級、１級については、筆記試験および実技試験ともに、全体指導だけでなく放課後の個別指導にも力を入れた。				・被服、食物、保育・福祉の科目を柱とし、各自の進路希望や興味関心に対応した教育課程を設定している。 ・専門性を高めるため、特別講師を招聘した授業の展開、検定取得に力を入れている。
評価	C	・実技が苦手な生徒に加え、筆記試験で不合格となる生徒もおり、合格率が低くなった。 ・検定への苦手意識が高く、三冠王を目指す生徒が例年より少なかったが、挑戦した３名は全員取得することができた。			A　・「大変良かった」「良かった」の合計が90%を超えた。来年度はさらに充実した学びとなるよう工夫したい。
学校評議員の意見	・資格取得については、就職時の評価や資格手当など具体的なメリットを生徒が理解できるよう伝え、学生のうちに価値に気づいて取り組めるよう促してほしい。 ・生活文化科では検定1級の難しさから取得率が目標に届いておらず、実技指導の工夫をお願いしたい。 ・学びへの満足度は92%と高く、残る不満の要因を分析し、芽生えた目標意識や意欲をさらに伸ばす指導を期待します。				
次年度へ向けての課題	・生徒の実態を十分考慮し、全体指導と個別指導を効果的に行い、目標を達成できるよう努めていきたい。				・専門学科に学んで充実した３年間であったと感じるよう、行事、諸活動について検討を重ねていきたい。

（評価基準　A:達成した　B:ほぼ達成した　C:あまり達成できなかった　D:達成できなかった）